

Motivationに関する研究

—Raynor 理論の検証を中心に—

伊 藤 義 美

問題及び目的

達成動機及び達成動機づけの実験的研究の発展は、おおむね次の4つの段階が設定できよう。

- I 達成動機の測度として、nAch (達成欲求) の指標を開発する時期
- II 達成動機の測度としてのTAT測度の妥当性を検討する時期
- III Atkinsonによる達成動機づけ理論 (1975モデル) の提出と1975モデルの検証の時期
- IV Atkinson理論の発展及び修正の時期

Raynor (1969, 1974) は、「Atkinson理論は即時的な目標や結果の考察に限定され、達成行動が将来の目標や成り行きに影響を与えるという期待とその価値の効果を理論から欠落させている」と批判して達成動機づけ理論の精巧化を試みた。Raynorの精巧化理論は、動機づけの「期待—価値」理論 Lewin (1938) の行動の分析のうえに構築されている。

一連の仮定に基づいて合力的達成動機づけ (または合力的達成志向傾向) の強さは、次のように決定される。

$$T_s + T_{-f} = (M_s - M_{AF}) \sum_{n=1}^N (P_{1sn} \times I_{sn})$$

ここで M_s と M_{AF} は比較的安定的なパーソナリティ傾性としての成功達成動機と失敗回避動機である。また、 P_{1sn} は n ステップでの主観的成功確率、 I_{sn} は n ステップでの成功の誘因価である。両者は $I_{sn} = 1 - P_{1sn}$ の関係にある。1, 2, …, n , …, N は通路で予期されるステップの生起順序をあらわす。

精巧化理論とAtkinson理論は、当面の活動が将来の目標や結果に影響を与えないと期待される場合に等価的である。即ち、即時的活動が通路における唯一のステップである場合 ($n = N = 1$) や当面の活動の成否が将来の活動の機会に影響を与えない場合 (無関連通路) である。

こうして合力的達成動機づけの強さは、達成と関係する動機の個人差、通路の型と長さ、そして将来の主観的

成巧確率の総和の関数であると仮定される。

本研究の目的は、通路の長さや動機の個人差に着目してRaynorの精巧化理論の妥当性を検証することにあるが、その際に新しい視点として通路の時間的長さが導入される。

実験 I

従来の通路の型から通路の長さや研究の視点を移す。2ステップ連関通路と4ステップ連関通路を直接的に導入してパフォーマンスへの効果が検討される。Raynor理論から動機群と通路の長さとの交互作用効果が導出される。

方法: 被験者は中学1年生、4クラス。実施者は筆者。
動機群の選出: 4校のTAT図版に対して中性的条件下で書かれた想像物語から簡便法によって達成動機を得点化する。この合計得点を M_s の指標とする。なお、判定者間の信頼性係数は $r = .84$ 、 $N = 128$ であった。 M_{AF} の指標としてはTATQの修正版で得たテスト不安の合計得点を用いる。TAT得点とTATQ得点の相関は $r = -.083$ である。双方の合計得点をT得点に変換して $T_{Ach} - T_{Anx}$ 得点を求め、 $T_{Ach} - T_{Anx}$ 得点の上位16名を $M_s > M_{AF}$ 群、そして下位16名を $M_s < M_{AF}$ 群とする。

第1ステップの達成課題: 複雑度を異にする3種類の計算問題 (S課題, M課題, C課題) がそれぞれ3試行用意された。1試行の許容時間は1分間である。

実験条件: 実験は動機測定4日後に、当教育心理学教室で開発している新しい知能検査の資料を得るために協力を要請するという設定で実施された。2ステップ連関通路の導入—「検査は2日間に渡って2回行なわれる。2回目の検査を受けるためには1回目の検査に合格しなければならない」と教示して、第1ステップの道具的価値を認知させることによって操作した。4ステップ連関通路の導入—検査は4日間に渡って4回行なわれ、次ステップに進むためには先行ステップを成功的に通過することが必要であることを認知させることによって操作した。パフォーマンスは、第1ステップの3種類の課題で測られた。なお、被験者は各試行の前に要求水準を設定することを求められた。

結果：パフォーマンスの測定として合計正答数が用いられた。分散分析の結果、動機群と実験条件との有意な交互作用効果を見いだせなかった ($F < 1$)。このことは3種類の課題にも適合していた。しかし、合計目標数において、動機群と通路の長さとの交互作用が有意に近いことを見いだした ($F = 3.89, P = .053$)。こうして、達成行動水準と認知水準での結果のパターンに違いがあることが明らかになった。実験事態で効いた可能性がある要因—知能と要求水準の設定—が指摘されると同時に、一連の通路の脈絡でのパフォーマンスが問題となることを議論した。

実験 II

目的：実験 I で指摘した2つの要因を統制するとともに、1ステップ通路から5ステップ連続通路までの一連の通路を導入して通路の長さとのパフォーマンスの関係を検討する。実験 II で導入した通路は、時間的には長期的通路 (LT通路) であるところに特徴がある。LT通路では、各ステップ間の時間的距離は1日である。

主要な仮説：通路の長さとのパフォーマンスの関係を予測するために、Raynor理論の他に2つの試案が実験 I の結果から導出された。試案 I はRaynor理論に最適水準の考え方を採り入れたものであり、試案 II は目標勾配仮説の援用である。次に、検討した主な仮説をあげる。

Raynor理論から予測される仮説

仮説 II 「 $M_S > M_{AF}$ 群のパフォーマンスは増大を続け $M_S < M_{AF}$ 群のパフォーマンスは減少を続ける。従って動機群と通路の長さとの有意な交互作用効果が見いだせるであろう。」

試案 II から予測される仮説

仮説 IV 「最大の合力的接近傾向が5ステップ連続通路までに存在しない場合、 $M_S > M_{AF}$ 群と $M_S < M_{AF}$ 群においてパフォーマンスは増大を続けるであろう。」

仮説 V 「最大の合力的接近傾向が5ステップ連続通路までに存在する場合、 $M_S > M_{AF}$ 群と $M_S < M_{AF}$ 群において通路の長さとのパフォーマンスの関係は逆V形を示すであろう。」

方法：被験者は中学2年生 10クラス。実施者は筆者一人。動機の測定や動機群の選出は実験 I と同じ方法によったが、動機群の選出の際には各群の知能偏差の平均が50から51の範囲にくるよう厳密に統制された。第1ステップの達成課題や実験条件の導入の方法は、実験 I と同じである。なお、1ステップ通路では力試しのつもりで取り組むよう教示された。各課題の許容時間は3分間であり、被験者は要求水準の設定を求められなかった。課題の順序効果が除去され、被験者は課題達成の前後に認知水準の動機づけの強さを自己評価した。パフォーマンス

は、第1ステップの3種類の課題で測定された。

実験 III

目的：実験 II と同様に1ステップ通路から5ステップ通路までの一連の通路が導入されるが、時間的には短期的通路 (ST通路) であるところに特徴がある。ST通路では、先行ステップが終了すると次位ステップが即時に後続することを強調した。

実験 II で提出した仮説と次の仮説を検討する。

仮説 VI 「ST通路がもたらす切迫性が、LT通路で得られる結果により明確な傾向を与えるであろう。」

方法：被験者は中学2年生10クラス。第1ステップの達成課題は、S課題とC課題の2種類である。2ステップ分の達成課題が同時に呈示された。その他は実験 II に従った。

結果と考察

実験 II と実験 III の結果を対比させながら考察する。LT通路では動機群に、ST通路では通路の長さとの動機群に有意な主効果を見いだした。動機群と通路の長さとの交互作用効果は認められず、Raynor理論から予測された仮説 II は、双方の通路において支持されなかった。 $M_S < M_{AF}$ 群のパフォーマンスと通路の長さとの間にはLT通路において4次的関係があり、ST通路において3次的関係があった。一方、 $M_S > M_{AF}$ 群の傾向は、通路や課題の違いによって変動を示した。こうして双方の通路において、パフォーマンスと通路の長さには曲線関係があった。LT通路ではパフォーマンスと動機づけの自己評価のパターンに一致が認められず、ST通路では類似したパターンを見いだした。

一連の通路をS (Short) 通路、M (Intermediate) 通路そしてL (Long) 通路に3区分して分析した。パフォーマンス及び認知された動機づけと通路の長さには逆V形関係が見いだされ、目標勾配仮説を援用した試案 II からの説明が有効であった。中程度の長さを持つM通路においてパフォーマンスは最も優れ、評価された動機づけも最も強かった。特に、ST通路では両動機群ともこの傾向が顕著であった。ここに、仮説 V と VI が支持され、仮説 IV は部分的に支持された。

こうして、本研究で得られたパフォーマンスについての結果は、Raynorの精巧化理論や試案 I でよりも目標勾配仮説を援用した試案 II によってより妥当な説明を得た。また、通路の長さ (ステップ数) が同一であっても通路の時間的長さの違いが、即時的な達成行動や認知された動機づけに異なる効果を持つことが明らかになった。Raynorの精巧化理論には、通路の長さやステップの時間的要素への考慮が欠落している。Raynor理論と本研究の問題点をいくつか指摘するとともに若干の考察を加えた。